

荒木俊馬先生の思い出

宮本 正太郎

7月10日夜、荒木俊馬先生が急逝された。京都は記録破りの暑い日が続いていた時であった。京都大学宇宙物理学教室の元勲として、かけがえのない存在であられたし、京都産業大学の創立者として元気で御活躍であられただけに突然の御逝去は悔まれてならない。

昭和のはじめ頃、ドイツ留学より帰られた先生は新鋭の天体物理学者としてまぶしいばかりの存在であった。東京の萩原雄祐先生、京都の荒木俊馬先生は東西の輝かしい存在であった。

京都大学の宇宙物理学教室は新城新蔵先生が創られたものであり、新城先生が総長になられたあと、観測は山本一清先生、球面天文は上田禎先生、天体物理学は荒木俊馬先生とその協力者竹田新一郎先生の三部門にわかれて研究が推進されていた。新城先生のはじめられたもう一つの分野は中国の天文学史であったが、これは京都大学の東方文化研究所、現在の人文科学研究所で、新城先生のお弟子さんである能田忠亮、藪内清の両先生に引きつがれていった。

京都大学では教室名を天文学教室といわず、宇宙物理学教室と言っているが、これは新城先生の新しい天文学を研究するという意気込みをあらわしたもので、新城先生の直系の後継者が荒木俊馬先生であった。私は昭和のはじめ入学し、ドイツより帰朝間もない頃の先生の講義をきき、ついで研究室の末席に加えていただき、研究の指導をうけた。先生の講義は天体力学で、時間のはじめから終りまで黒板に向かって数式を書かれ、我々学生はそれをノートに写すのに追われたものである。先生の盤書はまことに見事で達筆であった。

この頃の天文学は天体物理学の勃興期であった。新しい天体物理学の基礎としての相対論や量子力学が物理学教室で講義されるようになったところだし、アインシュタイン、シュレーディンガー、ハイゼンベルグ、ディラックなどがまだ現役第一線の学者で、時々宇宙関係の論文を発表していた。

シュワルツシルドの輻射輸達論は天体物理学のはじまりと言ってよい研究であったが、これに続いて第一次大戦後、オランダではザンストラ先生、ミネルト先生が秀れた研究を発表されていたし、イギリスにはエヂントン、ついでミルン、チャンドラセカールが次々とおびただしい数の論文を書いていた。またアメリカは大天文台を次々に建設して、少くも観測の分野では世界の第一位にのしあがってきた。H.N. ラッセルのいわゆるラッセル図

表について、オットー・ストゥルーフは恒星大気のスペクトル研究で画期的な論文を次々と発表していた。またハッブルは星雲の観測で独自の分野をひらいていった。

こうした世界的情勢の中で、荒木先生はセフェイドの大気の研究で学位をとられ、ついで白鳥座P星その他の輝線スペクトルを示す特異星大気の理論研究に力をいれていられた。私が研究室に入れていただいた頃、ゼミに集まるメンバーは荒木先生をはじめ、竹田新一郎先生、栗原道徳、千田勘太郎、上谷良吉の諸先輩であったが、いずれも亡くなられ、荒木先生だけ最近まで御健在であった。

研究室に加えていただいて間もなく、昭和11年6月の北海道皆既食があった。荒木研究室からも観測隊を送ることになり、竹田先生を隊長として北海道枝幸に出かけた。私も一員に加えてもらってコロナの写真を撮る係りをつとめた。太陽は正常平凡な恒星であるが、コロナ層ともなると熱平衡論的解釈は効かず、特異星大気と同類であり、我々の研究室のよき研究対象であった。

研究室に入れてもらいはしたものの、独創的な研究をして論文を書くにはどうしたらよいか、さっぱり見当がつかず、うろうろしている時、荒木先生は、惑星状星雲の中心星の温度を決定したザンストラ先生の論文を読むように命じられた。私はこの天才的論文に接してはじめて研究への眼が開かれた想いであった。荒木先生にその事を申し上げると、先生はにこやかに深くうなずいていられたので、私も自分の受取り方は正しかったという自信をもった。私はザンストラ先生のアイディアにあやかって惑星状星雲の酸素禁制線強度から、星雲のガス温度を決定する方法を思いついた。この時には、計算のはじめから論文にまとめる時の英文まで、先生は積極的に指導して下さった。私にとって最初の論文であったが、これに対して先生は早速学位を下さってすっかり恐縮した。同じ方程式を太陽コロナに適用すると、コロナが百万度という高温状態にあることが結論される。こうして私の研究生生活は荒木先生の御指導でスタートしたのである。

先生の御指導は研究分野だけではなく、私がロシア音楽に興味を持っているのを知られて、毎週時間をきめてロシア語の手ほどきをして下さった。若造一人のため、大先生が時間をさいて下さったことには感激した。この頃、先生のお宅は相国寺の近くにあり、私も同じ相国寺の門前町に下宿していたので、夕方、研究室から家に帰るとき、よく先生のお伴をしているいろいろお話を伺っ

た。百万遍から西え、亂の森、下賀茂神社の橋を渡って出町に出て、同志社の裏手を通る。勉強以外の色々のお話を伺ったが、なかでもドストエフスキーについて色々話され、私にドストエフスキーの小説を読んでみるように勧められた。それまで私はトルストイのアンナカレーニナくらいしか読むことがなく、ロシアの作家はヨーロッパかぶれらしいと思って、たいては関心を持たなかったのであるが、重厚でロシアの土の臭のするドストエフスキーの小説にはすっかり興味をひかれた。音楽については、子供の頃、ひとなみにシューベルトだ、ショパンだと騒ぎ、大学時代にチャリアピンを聴いてムソルグスキーに傾倒していたが、先生はワグナーの音楽の良さを教えて下さった。ワグナーの「さまよえるオランダ人」のレコードをお宅で聴かせていただいたことは今でも強く印象に残っている。吉田中大路に御転居ののち、しばらくの間、御令息雄豪君の家庭教師を勤めさせていただいたが、これも学習ののち、先生のお部屋に報告にゆき、お話を伺ったり研究の指導を受けたり、どちらがサービスしているのか判らないような次第であった。

先生はお酒がお好きであったが、この点、私は不肖の弟子であった。お正月には研究室の先輩がたは先生のお宅に押しかけて新年宴会をしていられた。一度だけ祇園にお伴したことがあるが、先生は歌われるでもなく、杯をかたむけながら、若い連中がはしゃいでいるのをいかにも楽しく満足そうに眺めていられた。昔の先生がたは沢山の弟子を引き連れて時々呑みにゆくくらいのサラリーをもらっていたのであろうか。荒木先生は熊本

出身で、生涯古武士の風格をもっていられたが、それと同時にドイツ的なモダンなセンスも身につけていられた。

第二次大戦の近づくにつれ、先生は国粹的な傾向を強めてゆかれた。研究室の床をあげて畳を敷き、坐り机をおいて勉強していられた。研究室の論文集も、英文のものと共に邦文のものを新しく発刊された。先生は筆のたつ方であったから、天文学普及についても啓蒙書を多く書いていられる。神戸の実業家笹部氏の要請を受け、啓蒙誌「天文」を編集されたこともある。この中には新城新蔵先生の記念号も出されている。

戦争がはじまり、先生は愛国的な活動に積極的に参加されたが、終戦と同時に大学を退官され、丹波の寒村夜久野にひきこもられた。悠々自適の生活のなかで、恒星社の故土居客郎氏の要請もあり、幾冊かの啓蒙書を書いていられる。研究室に残されて途方にくれたのは上野季夫氏、川口市郎氏、服部昭氏などであるが、その後これらの人達は先生のあとをつぎ、徐々に研究室を再建して今日に至っている。

先生の弟子の一人である高木公三郎氏がよく言っていたように、荒木先生はこのままで納まる方ではなかった。やがて京都に産業大学を創立され、これも先生の弟子の一人で実業界で活躍していられた磯村咄夫氏がこれを助けられ、数年のうちに立派な総合大学と発展させられた。先生の育てられたこの大学は一般社会での評判もよく、これからも増々発展してゆくことであろう。京都大学の宇宙物理学教室と共に、先生の巨大な記念塔ともいえよう。

桁外れ——荒木先生の憶い出

藪 内 清

昨日(8月8日)仙台から京都に帰ってきた。よんどころない用事(?)で七夕祭りでごったしがえている仙台を訪れなければならなくなった。6日に大阪空港を立ち、2時間半ほどで花巻空港に着き、花巻温泉に一泊した。7日には東北本線で屋前の仙台につき、七夕祭りを見物したり、天文台、博物館、城跡などを見てまわり、その日は仙台で一泊した。7人ほどの団体であったため、当地の旧知にもお目にかかれず、その点では不本意な旅行であった。仙台までの往路は、飛行時間と東北本線の時間をあわせて4時間あまり、帰途は列車に乗っている時間が7時間あまりであった。仙台行も便利になったが、もし直接に飛行機で仙台へ行けば、大阪から2時間あまりで到着することができるであろう。

今度の仙台行きは花巻で道草を食った。私が最初に仙台へ行ったのは、昭和8年4月初めにここで催された日

本数学物理学学会に出席するためであった。この時の旅行は、今度の旅行と同じように、途中で道草を食った。それもやや異常な道草であった。私が京都大学理学部宇宙物理学教室を卒業したのは昭和4年であるが、卒業と前後して主任教授の新城新蔵先生は京大総長となり、上田穰、荒木俊馬の両先生は海外に留学された。教官として残ったのは山本一清先生ただ独りで、急いで講師であった竹田新一郎さんが助教授に昇進され、さらに学外から百濟教猷先生を助教授に迎えてどうやら格好をつけたのである。卒業したばかりの私たちは指導教官を失って途方に暮れたというのが、当時の実情であった。やがて2年の留学を終えて上田・荒木の両先生が帰朝された。空いた1つの教授席は上田先生によって埋められ、荒木先生は助教授のままに残された。

昭和8年の仙台行は新婦朝の荒木先生に引率された修